

## 大学教育総合センターだよりの刊行について

大学教育総合センター長 西頭 徳三

愛媛大学では、平成13年4月大学教育総合センターが設置され、共通教育体制が一新されました。そして、約6ヶ月間の新カリキュラムの実施をふまえて、『大学教育総合センターだより』創刊号をお届けできることになりました。

本センターの特色の一つは、国立大学の同種のセンターと機能面で大きく異なっていることです。既存のセンターは、高等教育研究に主眼を置いています。ところが、愛媛大学のセンターには、大学教育の研究部門に加えて、共通教育実施部門があります。さらに、コミュニケーションのための英語教育を担当する英語教育センターも設けられています。

つまり、本センターは大学教育に関する「研究」「実践」「国際化対応」という三つの目的とそのための三つの組織からなっています。これは、「愛媛大学方式」とも呼べる、全く新たな教育組織です。

本センターが所期の目的を達成できるかどうかは、その運営如何に懸かっています。改革目標の「共通教育の質的向上」のためには、これら組織の三位一体的運営が不可欠です。この広報誌は学生・教官・職員が直接、間接に本センターの運営に参画していただくためのものです。なおすでに、各学部の学生広報モニターが企画・編集に加わっています。

---

### 大学教育総合センターニュース

#### # 大学教育総合センターの省令施設化について。

本センターは平成13年4月より学内措置施設として発足しましたが、このたび文部科学省から、平成14年度4月より省令施設化する方向で概算要求することとした旨の連絡がありました。センターでは現在、これに対応する組織や規定等の整備について検討を進めています。

#### # 大学教育総合センターの省令施設化に向けて、専任教員の選考が進められています。

教育システム開発部教授として、法文学部人文学科松久勝利教授を配置（併任）。

教育システム開発部助教授1名を公募する。

英語センター専任教員1名（教授または助教授）を公募する。

#### # 平成14年度共通教育開講計画の検討が始まっています。

本計画の立案は平成13年10月末日までに確定し、11月10日ごろまでに各授業担当教員に通知されます。その際、現在改訂作業中の「教務ハンドブック」も配布しますから、授業開始にいたるまでに必要な準備等についてご確認ください。

#### # 教育システム開発部では「学生による共通教育の授業評価アンケート」の見直しを進めています。平成13年度後学期分から適用する予定です。

#### # 平成13年度の大学教育総合センター会議委員、各種部会、委員会委員、及び英語センター教員の名簿を巻末に掲載しております。

#### # 共通教育学生広報モニターを募集します。巻末の募集要項をご覧ください。

## 特集1：「履修状況改善のためのアンケート」の結果について

本学の「共通教育ルネサンスプラン」が実施されて、最初の学期を終了しました。多くの問題を抱えたままのスタートでしたから、点検すべき事柄は多々あるかと思われます。これらについては今後さまざまな角度から検証すべきですが、今回は急遽実施した「履修状況改善のためのアンケート」を取り上げてみることにします。

ご承知のように、主題別科目は学生の自主的な学習意欲を尊重するために、履修にあたっては「自由選択制」を原則としました（やむをえない事情で、一部、受講制限を実施した科目もあります）。これを受けて学生はどのような受講行動をとったか、またこのことにより科目による受講生数の不均衡が生じた事について、なんらかの対応が可能かどうか、検討のための材料を得るためにアンケートを実施したものです。大変急な実施依頼にもかかわらず、ご協力いただきました各科目担当の先生方には厚く御礼申し上げます。

本アンケートは初めて行ったものであり、これに基づいてなんらかの対策を打ち出すことは、もとより尚早であり、以下の報告もわずかばかりのまとめを試みたにすぎません。しかし共通教育の質的向上という点からして、科目による受講生数の大きな不均衡は放置しておけない問題です。特効薬の処方は無理としても、少しでも改善可能な方法を探るために、今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

### アンケート項目について

今回は資料1のような項目で実施したが、履修状況の改善という目的からすると、もう少しきめ細かい項目設定が必要と思われる。今後の検討課題としたい。

### アンケートの結果について

1. 全ての科目について、受講生数に対しアンケート回答数が大幅に下回っている。後者を実質的な出席率とみてよいのかどうか、学期末の試験受験者数とつき合わせるなどの調査が必要であるが、今回はこの作業は行っていない。ただこの落差の大きい科目については、出席点検をしていないことが原因となっているようである。
2. ここでは、科目による受講生数の不均衡の原因を探るという観点から、問いごとの回答数を折れ線グラフで表記した図を、三つほど掲載しておく。
3. 全体の受講動機状況（図1）を見ると、「シラバスを読んで」と「講義タイトルに興味をもった」が圧倒的に多く、これは受講生数の多い少ないにかかわらず現実には、受講生数の大きな開きが生じているのは何故であろうか。
4. そこでアンケート数250以上（図2）と50以下（図3）を比べると、前者は問5の山が低いのに、後者はそれなりに高さがある。前者と同じ傾向は、ここに図は掲載していないが、アンケート数150以上にも見られ、100以下は後者の傾向に近くなる。一つの推測として、受講生数の多い科目はシラバスや講義題目がより広い層の関心を喚起する内容であり、少ない科目のそれはマニアックな傾向があることが考えられる。

5. これはアンケート数250以上の科目が問9、10、12の割合が問2と拮抗しているのに対し、アンケート数50以下ではこれらが少ないことも連動しているのではないか。問9、10はアンケート数100以下で問5と拮抗し、それ以上になると増加する傾向がある。今回のアンケートだけでは推測以上に出ることはできないけれど、「シラバス」や「講義タイトル」が大きな動員力を発揮する場合に、それに比例して付和雷同組も多くなることは十分に考えられる。
6. 問10は対応の難しい問題である。「同じ時間帯に他に受講したい科目がない」という場合に、本人にどんな科目を受講したいのか、明確なイメージがあるのかどうか。そもそも知るという人間としての本分からするならば、9～16科目用意されている中で、一つしか受講したいものがないというのは、考えにくいことではないだろうか。しかしまた、おそらくはこの点に高校までの学習と大学での知のありかたとのギャップがあるのかもしれない。ここはやはり教員それぞれが、シラバスや講義タイトルを魅力溢れるものにするにより、学生にこんな失礼なことを言わせないようにする工夫が必要なのであろう。
7. 全体的に問4がきわめて低い数値であるのは、ルネサンスプランがスタートしたばかりなので仕方がないが、にもかかわらずアンケート数250以上の科目で問12が多いことが不思議である。新カリキュラムが始まったばかりなのに、どうしてそのような風説が生じるのであろうか。こうした風説に動かされる層は、実際に授業運営の障害になる可能性が高いことから、教員としては、授業でそのような風説を打ち消す、あるいはシラバスがそのような誤解を招いていないか、点検するなどの対応が求められるのではないか。

なお、解析方法としては、(問1～問7までの合計数)から(問8～問14までの合計数)を引いた数をアンケート回収数で割った数値を尺度とすることが考えられる。この値が1を超えると、積極的な動機で選択がなされた、1を下回れば消極的動機で選択がなされたと考えることができる。ただし問8や13を消極的動機と位置づけることは問題であり、また処理の過程で受講生数を平準化するため、科目による不均衡の原因をつかむ方法としては不向きでもある。しかし、この方法によると少なくとも次の二つのポイントが注意を引く。

一つは、受講生数(アンケート回答数)の多い科目が積極的動機(メリット)の値が高いとは限らないことである。これには上記の5との関連が考えられる。

第2に、この値と回答率(出席率)との相関を調べてみると(図4)、出席率が高い科目は積極的動機で受講しているという、ごく自然な結果が出ていることである。今回の調査ではシラバスと講義タイトルに惹かれて受講したという割合が圧倒的であることから、これらが出席率とも関係していることが分かる。

## 小 括

上述のように、シラバスと講義タイトルが受講動機の最大要因であることは間違いない。これらの充実がますます求められるが、これらによる動員力が消極的動機をも増幅させることに対してどう対応するかが問題である。もちろん「友達にさそわれて」「なんとなく」受講している学生をも、学ぶよろこびへと引き入れることは教員の責務であるが、実際には至難の業と言わざるをえない。やはり動機段階でプラス志向へともっていくことが大事になろう。それには王道はなく、やはり問4(講義内容の評判が高い)を増やしていく、地道な取り組みが必要となろう。言い換えると、大学の教育システムとしては、今後教授能力の開発(FD)に本格的に取り組まね

ばならないし、また教員一人ひとりの自発的な取り組みとして、学生による授業評価を一步一步自分自身の授業改善へとつなげていく努力を続けるしかないであろう。

## ▶履修動機アンケート調査資料

### 資料1

#### 履修状況改善のためのアンケートについて

愛媛大学大学教育総合センター

科目番号			
------	--	--	--

(数字のみ記入してください。)

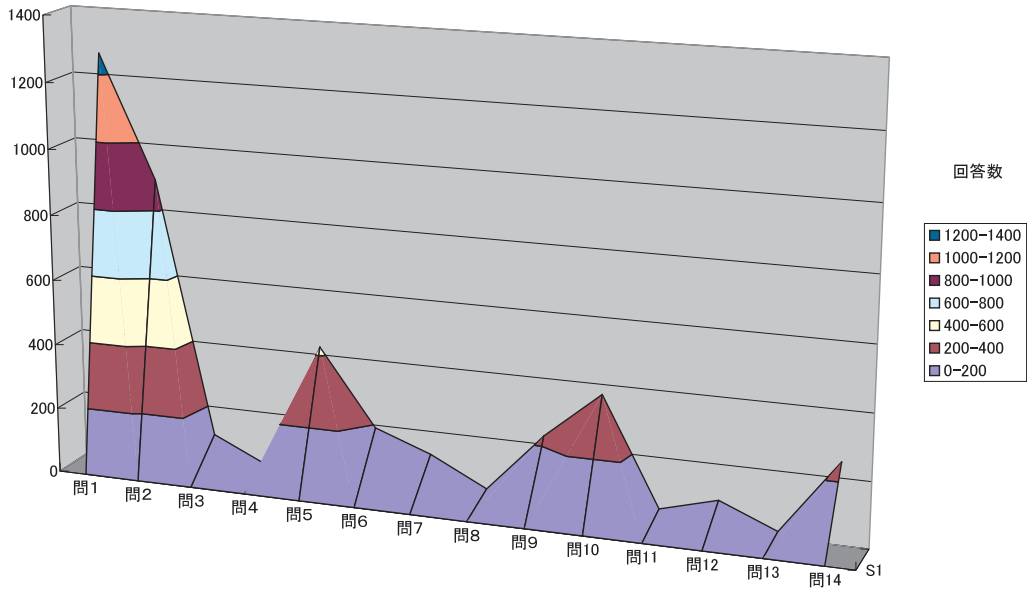
質問：あなたはなぜ、この科目を選択しましたか。以下の項目から3つまで選び次の○を塗りつぶしてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

- 1 シラバスを読んで興味・関心をもった。
- 2 講義タイトルに興味・関心をもった。
- 3 先生に興味・関心がある。
- 4 講義内容の評判が高い。
- 5 自分の得意分野である。あるいは専門分野と関連があり、知識や能力を伸ばしたかった。
- 6 自分の苦手とするところであり、この機会に勉強しようと思った。
- 7 自分の興味関心もあり、また教員免許の取得等、将来の資格のためにも必要であった。
- 8 この科目を受講するよう専門学部の指導があった。
- 9 友人に誘われた。友人が受けているから。
- 10 同じ時間帯で他に受講したい科目がなかった。
- 11 受講制限のため受講したい科目を受講できず、仕方なく選択した。
- 12 単位がとりやすい。あるいは試験が簡単であると聞いた。
- 13 自分としては興味は持てなかったが、教員免許の取得等、将来の資格のために必要であった。
- 14 ただなんとなく。
- 15 その他（自由に記述してください。)

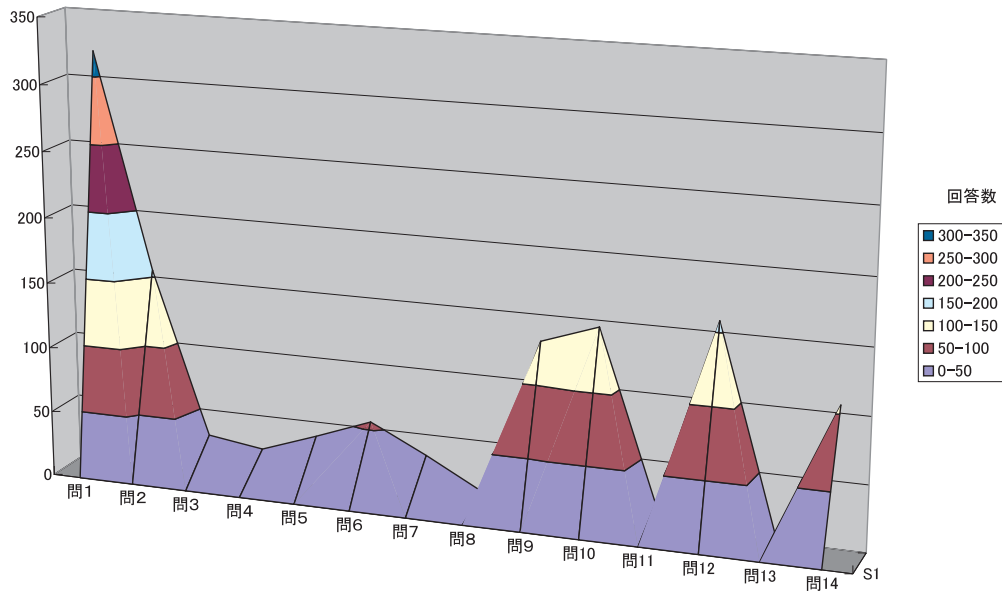
全科目帯の受講動機状況

図 1



アンケート数250以上の講義の動機

図 2



アンケート数50以下の講義の動機

図 3

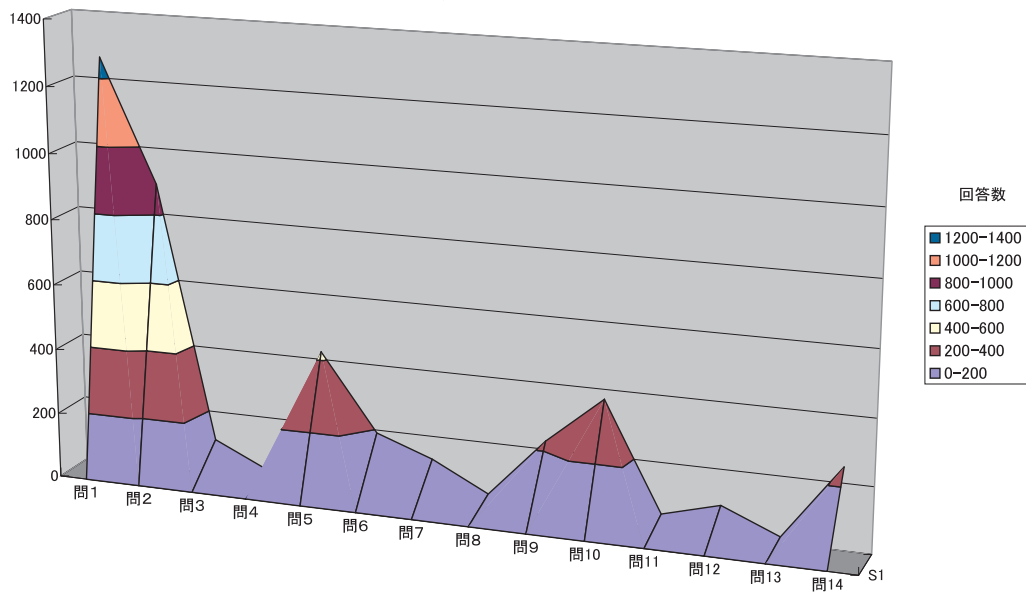
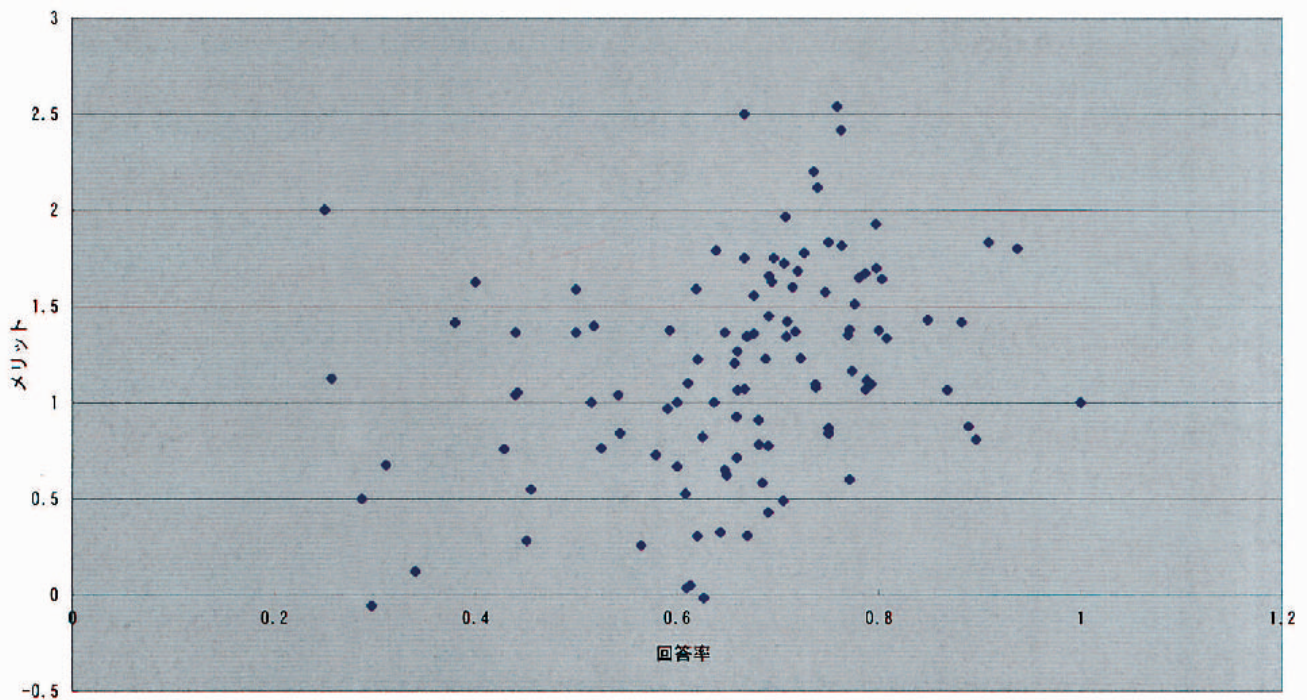


図4 回答数とメリットとの関係



### 学生モニターの見方

アンケート回答者数はイコール出席状況と言って良いと思う。実際に私が受講した科目の数字を見ると、教室内の様子と受講者数はあまりにもかけ離れているように感じた。アンケートは実施する時期によっても回答率が変わってくると思う。試験の時に実施すれば、受講者のほとんどが回答する。しかし、それ以前や以後なら、まじめに授業に出席している者くらいしか回答しないと思う。回答率の悪い科目というのは、受講者数のあまりにも多い、400人、300人、というような授業に目立つ。実際、学生は人数の多い授業はサボりやすく、さらに出席をとらない授業というのは出席で成績の判断をしないことは明確なため、出なくても大丈夫と考えていることがある。

意外と上回生からの情報で授業を選択している学生が少ない。授業を選択するとき重要な位置にあるのはシラバスだというのが分かった。シラバスと見比べると、詳しく書かれた内容のところに学生が多く集まる傾向があるように思える。

戸成 晃子 (法文学部総合政策学科2回生)

受講生数に対してアンケート数が明らかに少ない。これはアンケートを取った時に、その講義を欠席している人がかなりいると考えられる。出席をとらない講義は、出席をとって平常点として成績評価に入れる講義よりも普段の出席率が悪い。そのような講義は試験になると普段とくらべようがないほど出席率が良くなる。

出席率のわりと高い講義はA（問1～7までの合計数）－B（問8～14までの合計数）の値が大きい。これはその講義を積極的な気持ちで取り組んでいる学生が多いと考えられる。Bの数が多い講義は、卒業必修単位を得るために仕方なく受講したという傾向があるように思える。例えばA科目帯では、理学部2回生にとっては卒業必修単位の取得のために、読替措置がとられたが、分野「人間を知る」の中から履修するのが賢明であるので、必然的にこの分野の受講生数が多くなっている。このような場合、Bの数が多くなると思える。

豊田 ゆか（理学部物質理学科2回生）

---

## 特集2：愛媛大学の英語の授業が変わった

大学教育総合センター副センター長 柳澤 康信

『ニュージーランド出身のマシュー・マクドナルド講師(27)は最初の授業で、「Hello everyone!」と、いきなり大声で自己紹介。初めのうちこそ硬い表情だった学生たちも、やがてスムーズに英語が出るように。レナ・ジーガート講師(26)の講義では、ラジカセから軽快な音楽が流れる。

講師はテキストに沿った自作の教材を基に、矢継ぎ早に学生たちに質問を浴びせ、時に学生たちがひそひそと日本語を話すと、「You can speak anything, but only in English（私語はいいけど、英語でね）」と注意。ジーガート講師は「Please think my class as a fun, but come here every time（私の講義は遊びだと思って、でも絶対休まないで）」とくぎを刺している。

楽しさとともに、心地よい緊張感が漂う講義は好評で、法文学部1年今岡まどかさん(18)は「無理にでも英語を話さないといけないから必死。だけど、すごく楽しい」と笑顔を見せる。

西頭徳三副学長は「うちの卒業生はみんな、英語で日常会話ができる時代が来る」と自信たっぷり。文部科学省も「画期的な取り組み。成果を聞きたい」と期待を寄せており、他の国立大学の英語教育にも一石を投じそうだ。』

上の文は、「愛媛大学の英語教育改革—会話力向上へ学内留学」というタイトルで読売新聞（平成13年5月14日付）に載った記事の一部です。この取材が行われたのが学期の始めだったためか、講師も学生も少し緊張し、とまどっている様子がうかがえますが、学期の後半になると学生も英語で話すことに慣れて「日本語を使ってはいけない」などという注意も必要なくなり、授業もスムーズに運んだようです。

この記事からも分かるように、今年度から共通教育の英語の授業が一変しました。この変化は専門用語で表現すれば、文法訳読式指導法 (Grammar-Translation Method) から「コミュニケーションのための英語教育 (Communicative Approach)」への転換ということになります。従来の訳読中心の授業では、正確な文構成法や語法に関する知識は得られますが、コミュニケーションの道具として「読む (reading)」以外の技能が直接には身につかないという問題点がありました。一方「コ

コミュニケーションのための英語教育」では、さまざまな状況で自分の意志や意見を的確に伝える能力を養成することが目標になります。

しばしば誤解されるようですが、コミュニケーション英語とは英会話のみを指すわけではありません。当然、文字を媒体としたコミュニケーションも含まれます。意思の疎通をするためには「聴く (listening)」、「話す (speaking)」、「読む」、「書く (writing)」の4技能を総合的に高める必要があります。日本の学校教育の現場ではコミュニケーション英語の重要性は以前から主張されていますが、残念ながら現在でも教師の説明を聞き、理解し、覚えるという受動的なやり方が主流を占めています。そのため、「話す・書く」という能動的技能の発達がどうしても遅れがちになります。とくに「話す」については大学入試で課せられないため、大部分の学生は話す経験をわずかしかもたないまま大学に入ってきます。これら能動的技能を補強するためには、英語を実際に使って言語活動をする経験が必要になります。

刷新された1回生の授業（英語A、英語B）では、共通テキストに沿って「話す・聴く」に重点をおいた言語活動が行われます。各々の学生は90分の授業の大半の時間をペアとなった相手と交互に話すことに集中します。教師は必要な指示や質問をしますが、教師自身はむしろ「しゃべりすぎない」ことを心掛けています。2回生の授業（英語C）では、教師の提示したテーマについて情報を収集し、それを他者に伝えることが中心になります。教師用テキストでは、教えることの目標をつぎのように定めています。

There are three main goals to the instruction provided in this coursebook. Firstly, many Japanese students arrive at university with an extensive passive knowledge of English, although most have considerable difficulty making use of what they know in actual communicative settings. A primary objective of these teaching materials is thus **to activate this passive knowledge** by creating a framework for classroom participation and learning in which students have a great many opportunities to communicate with each other and with their teacher in “real-life” situations in English. Secondly, the instruction offered in these courses should provide students with **social skills in English** which will enable them to communicate effectively and naturally with other people, both in Japan and abroad. Thirdly, this coursework is designed to create **a communicative foundation** which will permit students to pursue their studies in English at more advanced levels of instruction in the future.

このような英語教育についての変革は、大学教育総合センターの前身である大学教育研究実践センターで検討されてきました。同センターによる「英語教育の改革についての提言」（平成12年5月）では、「愛媛大学は、専門学部の如何を問わず、意思の伝達及び情報の発信に必要な英語力を習得できる教育体制を新たに構築し、国際語としての認識を養い、実用語として用いる能力を開発する英語教育を実施する」ことを目的に掲げています。この提言を基に、英語教育センターが組織され、「コミュニケーションのための英語教育」が具体化されました。その具体化の著しい特徴は、(1)少人数のクラス編成、(2)英語を母語とする教師 (native)、またはそれに匹敵する英語運用能力のある教師による授業担当、(3)英語のみを用いる授業です。学生が授業に能動的



に参加しやすくするために、すべてのクラスを20人程度の少人数にしました。今年度はそのクラスの9割以上をネイティブが担当しています。そして、授業では教師も学生も原則的に英語だけを用います。これは、音声としての英語に触れる時間を多くし、できるだけ「英語で考える」思考回路を作り上げるためです。

この英語改革でもっとも期待されるのは、多くの学生が授業を楽しみながら英語学習への動機づけを確立してくれることです。前頁の英語の表現を借りるならば、高校までに得た英語の幅広い受動的知識 (an extensive passive knowledge of English) を活性化 (activate) できるようになることです。これが達成できれば、各学部の専門教育においても意欲をもって「英語で学ぶ」姿勢が身につくようになると思われます。

授 業 科 目	単 位	科 目 区 分	開 講 時 期	授 業 科 目 の 概 要
英語 A	2	必 修	1 年前期	「基礎コース」。自己紹介をする、適切な説明を行う、賛成・反対する、自分の好みについて語るなどに関する言語活動を行います。これらの活動を通して、話題の導入の仕方や発展のさせ方、コミュニケーションを円滑に運ぶための留意点、身近な話題についての意見の延べ方、様々なトピックについての議論の仕方を学びます。
英語 B	2	必 修	1 年後期	「意思伝達コース」。英語 A を発展させた英語コミュニケーション授業です。実際の英語コミュニケーションで話題となる教育、仕事、娯楽などのテーマに関する言語活動を行い、これらの話題に関連する様々な英語表現の習得と効果的な英語コミュニケーションを行うためのスキルの向上を目指します。
英語 C	2	必 修	2 年前期 又は後期	「情報収集・発信コース」。教師が提示した現実世界の様々なテーマについて、情報を収集し、それを他者に伝えることによって、英語を介した文化、社会、自然の理解を深めるとともに、能動的英語の基本的な運用能力を身につけることを身につけます。
英語 S 1	2	選 択	夏季休業中	より高い英語運用能力の習得を目指す学生向けのアドバンスト・コースです。「TOEIC対策」、「英語ライティング」、「応用オラル・コミュニケーション」などの授業を開講します。1 回生から 4 回生まで何度でも履修することができます。
英語 S 2	2	選 択	春季休業中	
英語 F A	2	再履修	1 年前期	英語 A、英語 B、英語 C の単位が修得できなかった場合にそれぞれ履修する科目です。夏季あるいは春季休業中に開講されます。
英語 F B	2	再履修	1 年後期	
英語 F C	2	再履修	2 年前期 又は後期	

## 平成13年度愛媛大学大学教育総合センターの教員スタッフ

平成13年度の本センターの教員スタッフが以下のように確定し、現在、活動中です。

### 大学教育総合センター

センター長 西 頭 徳 三 (副学長)  
副センター長 柳 澤 康 信 (理) (英語センター、共通教育企画実施部担当者)  
副センター長 山 本 久 雄 (教) (教育システム開発部担当)

### 大学教育総合センター会議委員

学 部	第9号第1項2号委員		第9条第1項第3号
	教務関係委員会の委員	そ の 他	センター長推薦
法文学部	清 水 史	井 藤 正 信	松 久 勝 利
教育学部	村 尾 卓 爾	山 崎 哲 司	山 本 久 雄
理学部	東 長 雄	柳 澤 康 信	林 秀 則
医学部	田 中 潤 也	河 野 保 子	前 山 一 隆
工学部	前 川 尚	高 松 雄 三	井 出 徹
農学部	林 和 男	高 瀬 恵 次	廣 谷 博 史

### 大学教育総合センターに置く小委員会の委員

#### 組織・規則小委員会

林 秀則 (理、委員長)      高瀬 恵次 (農)      井藤 正信 (法)

#### 予算小委員会

高松 雄三 (工、委員長)      林 秀則 (理)      松久 勝利 (法)

#### 広報小委員会

松久 勝利 (法、委員長)      山本 久雄 (教)      河野 保子 (医)

#### 施設・環境小委員会

井出 徹 (工、委員長)      井藤 正信 (法)      東 長雄 (理)

## 平成13年度共通教育企画・実施部の部会委員

(○印の委員が部会長、アンダーラインは大学教育センター会議から出る委員)

### 第1部会(基礎セミナー)

○大西 秀臣(工) 松本 長彦(法) 田邊 勝利(教) 樋高 義昭(理)  
小林 直人(医) 上田 博史(農) 井藤 正信(法) 高松 雄三(工)

### 第2部会(人間を知る)

○遠藤 克彦(法) 坂根 照文(法) 村上 恭通(法) 松本 長彦(法)  
壽 卓三(教) 橋本 巖(教) 松久 勝利(法) 村尾 卓爾(教)

### 第3部会(社会を知る)

○北原 鉄也(法) 和田 寿博(法) 竹川 郁雄(法) 松野尾 裕(教)  
松田 正司(医) 松岡 淳(農) 井藤 正信(法) 山本 久雄(教)

### 第4部会(自然を知る)

○井上 直樹(理) 大野 一郎(理) 阿部 康人(医) 遠藤弥重太(工)  
猪狩 勝壽(工) 杉森 正敏(農) 山崎 哲司(教) 林 秀則(理)  
高瀬 恵次(農)

### 第5部会(健やかに生きる)

○佐伯 修一(保) 宇高 潤子(教) 山本万喜雄(教) 三木 哲郎(医)  
海老原 潔(農) 村尾 卓爾(教) 前山 一隆(医) 河野 保子(医)

### 第6部会(こころ豊かに生きる)

○奥定 一孝(教) 西 耕生(法) 村上 恭通(法) 牛山真喜子(教)  
佐藤 栄作(教) バージン・ルース・キャロル(農) 松久 勝利(法)  
清水 史(法) 河野 保子(医)

### 第7部会(既習外国語)

○ロジャー・ジョン・デイビーズ(教) 井上 彰(法) 木下 英文(法)  
折本 素(英七) アニー・マーロー(英七) リチャード・ブライト(英七)  
柳澤 康信(理) 廣谷 博史(農) 高瀬 恵次(農)

### 第8部会(未習外国語)

○宇和川耕一(法) 池 貞姫(法) 立川 信子(法) 菅谷 成子(法)  
秋谷 裕幸(法) 寺下 太郎(農) 清水 史(法) 林 秀典(理)  
前川 尚(工)

### 第9部会(情報科学)

○天野 要(工) 岡本 直之(法) 平田 浩一(教) 中川 拓治(理)  
廣谷 博史(農) 高松 雄三(工) 林 和男(農)

### 第10部会(スポーツ・健康科学)

○久保 玄次(教) 陶山 啓子(医) 井上 誠治(教) 山田 寿(教)  
山崎 哲司(教) 山本 久雄(教) 前山 一隆(医)

### 第11部会(専攻別基礎科目)

○野田松太郎(工) 岡本 俊明(教) 野倉 嗣紀(理) 中村 慶子(医)  
疋田 慶夫(農) 東 長雄(理) 田中 淳也(医) 井出 徹(工)



## ……………共通教育学生広報モニターの募集について……………

大学教育総合センターでは、共通教育の質的向上をはかるために、平成13年度4月より、広報小委員会に学生モニター制度を設けております。現在は各学部2回生一人ずつ、6人の皆さんが活動しています。今回は新たに1回生の皆さんから各学部一人、6人を募集いたします。大学教育に自分の意見を反映したいと考えている人は、下記の要領により、ぜひ応募してください。

### 応募要領

#### 1. 活動内容

大学教育総合センターに対し、授業や学生生活、教育環境など、愛媛大学におけるキャンパス生活全般について率直な意見を述べ、その実現のために議論に加わる。

上記の活動には、具体的提案のための調査・研究プロジェクトに参加することも含まれます。

#### 2. 募集人員

各学部1名、合計6名

#### 3. 応募資格

平成13年度4月入学の学生

#### 4. 任 期

医学部学生は平成14年9月30日まで、その他の学部は15年3月31日まで

#### 5. 応募期限

平成13年11月22日（木）

#### 6. 応募書類

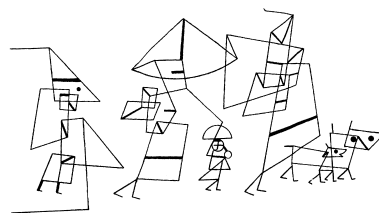
所定の応募用紙（共通教育係窓口で受け取ってください）に所定の事項を記入し、共通教育係窓口に提出する。なお、この用紙には「大学教育についての私の意見」（400字程度）という欄がありますから、ここに意見を書いてください。応募が多かった場合は、これによって選出します。

#### 7. 発 表

11月30日（金）15時までに  
共通教育掲示板に張り出します。

#### 8. 問い合わせ先

共通教育係窓口



みんなでお散歩 パウル・クレー

## 編集後記

「大学教育総合センターだより」の創刊号をお届けします。

本センターは主として共通教育の企画・実施に携わっていますが、その活動状況が全学的に見えにくいという側面があります。そのため本年4月の本センター発足当初より、広報活動の推進が課題となっていました。具体的にはホームページの立ち上げと「センターだより」の発行がその中身ですが、今回ようやく「センターだより」の創刊にこぎつけることができました。

刊行にあたっては「センターだより」をどのような方針で編集するかが議論になりました。本学だけを見回しても、実に多くの広報誌が定期的に刊行されており、そこにもう一つ、本センターの広報誌が加わっても、はたして目にとめてもらえるかどうか、非常に心もとない、というのが正直な気持ちでした。

議論の結果はきわめて平凡なもので、本センターの任務である「大学教育の質的向上」に有益と思われる提案を軸にしていこうというものでした。この方針に沿って、特集を2つ組んでみましたが、いかがでしたでしょうか。

「共通教育ルネサンスプラン」はスタートしたばかりですから、今後の改善が必要な問題は多々あるかと思われれます。今後センターとして取り上げていくべき課題について、共通教育係まで意見をお寄せください。なお、現在「工事中」のホームページが立ち上がりましたら、そちらでも意見をお寄せいただけるようになります。

(K. M)

### 蛇足：口絵について

画家パウル・クレー（1879～1940）にとり、「コロンブス」は未知なるものへとチャレンジする精神、「魚」は真理の豊穰性を象徴しているようです。

出典：

『コロンブスの卵』は Paul Klee “Das Bildnerische Denken” より

『みんなでお散歩』は Wil Grohman “Paul Klee” より